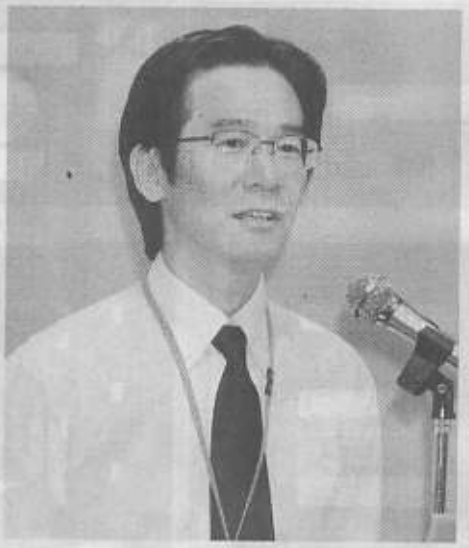
宮日ブランチ会

「資金の確保課題」

毛良さん 県産キャビアで講演



宮日ブランチ会でチョウザメ養殖などについて講演した県水産試験場小林分場の毛良明夫分場長

大手企業の県内拠点の代表者らで構成する宮日ブランチ会「くろしお」（代表幹事・田處正隆九州電力宮崎支社長、59社）の9月例会は22日、宮崎市のホテルJALシティ宮崎であった。県水産試験場小林分場の毛良明夫分場長が「宮崎県産チョウザメとキャビア～現状と今後の取り組み～」と題して講演した。

本県のチョウザメ研究は1983（昭和58）年、旧ソ連から国に贈られたチョウザメ（ベステル）を小林分場で受け入れたのが始まり。2004年に、より養殖に適したシロチョウザメの完全養殖に全国で初めて成功したことで県内での本格的な養殖がスタートした。現在、県内の民間7業者が参入しており、卵を塩漬けしたキャビアは13年にも年間約200キロの出荷が可能になる見込み。

毛良分場長はキャビアについて「世界的に見ても天然キャビアの生産量は海洋汚染や乱獲などで激減している。一方で、養殖が急激に伸びている」と現状を紹介。本県での養殖の課題としては、キャビア用の卵を採取できる状態に成熟するまでに8～10年かかり、資金面での余裕が必要になるため参入者がなかなか増えないことを指摘。長年の研究により蓄えられた飼育技術の提供や、温暖な気候による飼育環境など、本県が養殖に適した県であることに触れ、今後も参入者を積極的に募っていく姿勢を明らかにした。

最後に「今後は高品質を保持する加工技術が重要になるといわれている。この技術を確立して宮崎キャビアのブランド化を目指したい」と展望を語った。

MIYAZAKI BUSINESS NEWS